

朝鮮

遙かな追憶

神奈川県 井上 寿美子

山のように引揚げ荷物を積み上げたりヤカーと並んで私たちが歩き出すと、うしろから

「奥さーん、奥さーん」

と呼びながら後を追って来るオモニー（朝鮮人の女中）の涙を流している姿。

母も涙ぐみ、私もぐっと胸に込み上げてくるものに耐えながら、「さよなら、さよなら」と何度も振りかえって手を振っている。

それは四十八年も経った今でも、はつきり臉に焼き

ついている。京城引揚げのため我が家をあとにする朝の情景である。

私はこの六月で古稀を迎えました。

「おばあちゃん、おめでとう。いつまでも元気でね」と三人の子供と七人の孫たちの祝福とやさしい激励の言葉をうれしく聞きながら、これまで踏みこえて来たはるかな幾山河を思いうかべ、「よくここまで来たものだ」と言うしみじみとした感慨と同時に、今まで私を取り囲んで来たすべてのものに対して、改めて深い感謝の念を禁じ得ません。

私は京城からの引揚げの一人ですが、ほかの外地、例えば満州や北鮮からの引揚げ者が遭遇された恐ろしい体験、それはソ連軍の侵入による残虐行為や、暴民の報復的な略奪暴行などを受けたというような悲惨な体

驗はありません。

当時外地にあった日本人が、母国の敗戦という、いわば自分たちの立っていた土台そのものを失った時、だれもが味わった混乱と不安から来るいろいろの異常体験は、若かった私の心にもそれなりに濃い影を落としております。

それでも、私どもの引揚げそのものは、場所が京城という終戦後も比較的治安がよかった所だけに非常に幸いであったと申せましょう。私どもの苦労といえば、むしろ日本内地に引揚げてから一応生活の安定を得るまでの経過にあったと思っています。それは朝鮮生まれの朝鮮育ちなるがゆえに、母国とはいえ、日本内地にはよるべき本当の故郷を持たず、物心ともに全くの異邦人のような存在であった私たちが、背に負って来たリュック一つから再出発して現在に至るまでたどった険しい道のりでした。

京城を追われて

私の父は明治の末期に渡鮮、朝鮮総督府に勤め、全鮮各地に転勤を重ねましたが、私が小学校に入ること

に京城に戻り、三年後には、通信局を退いて京城駅前に郵便局を開設すると同時に古市町に一戸を構え、それから終戦となるまでこの仕事に専念しておりました。もちろん両親は朝鮮に骨を埋める考えで、従って私たち五人の子供（兄、姉、弟、妹）も皆そのつもりであったのはごく自然なことでした。

私は昭和十六年、京城第二高女を卒業してフランス教会内にあった啓星女学院に通っていました。太平洋戦争が始まったころは、ハワイ空襲、マレー半島上陸、シンガポール陥落といった華々しい戦果に国中が湧き立ち、京城でも「内鮮一体」のスローガンのもと、いろいろな祝賀行事が行われ、前線の兵隊さんの御苦労に感謝しつつ、ますます銃後の固めを誓いあっていました。

そのように緊張感の中でも明るさのあった昭和十七年夏、突然思いもかけず私に縁談が持ち上がりました。当時まだ珍しかった開襟軍服姿の青年が忽然と私の前に現れたのです。彼が井上でした。

井上は私どもと同じく、明治年間から渡鮮し総督府

の役人であった人を父として生まれ、昭和十三年に京城大学を出て朝鮮殖産銀行に入行したのですが、その年の暮には現役兵として入隊渡満、幹部候補生を経て南支に出征、大戦勃発とともにマレー半島上陸、シンガポール総攻撃にも一線部隊として参加、その後ビルマに転進、その平定作戦が終わった時に、それまでの兵団戦死者の遺骨を日本に送還する辛領隊の一員として一時帰国、その後休暇を得て久々に京城の両親のもとに帰っていたのです。それまで既に入隊以来四年近く経っており、そろそろ召集解除の時期にあたっていて来年は帰還できるのではということ、縁あって婚約だけでもいうことになったのです。

わずかな期間でしたが、帰還後の将来について語り合い、厳しい戦時下ではありましたが張りのある、そしてほのぼのとした思い出を残して彼は再びビルマへ赴いて行きました。

その後しばらくはお互いに元気な文通が続きましたが、次第に戦局が傾き、昭和十九年に入ってから日はを追って戦雲暗く、各地から玉砕の悲報が伝えられる

ようになりました。もうそのころは文通も途絶え、ビルマの戦況もひどいよう、井上の両親も私の家の者も、お互い口には出さないものの心の中には不安が黒い雲のように漂っていました。そう言った状況の中で昭和二十年八月の終戦を迎えたのです。私はその年の五月から三井軽金属という会社に勤め始めましたので、終戦も会社の中で知りました。戦況の悪いのは知りつつもまだ頑張れると思っていた私たちには、日本の敗戦は全く青天の霹靂でした。

戦地における、又日本内地の空襲による悲惨な実態の詳細はあまり伝わっていませんでした。これは特に植民地の動搖を避けるため情報や報道は管理されていたせいででしょうか。京城には一度の空襲もなく、諸物資の統制も内地ほどきびしくはなく、日常生活も比較的自由で、内地からわざわざ避難して来る人もいたほどで、限られた一部の人以上の一般市民には、それほど切迫した危機感が伝わっていなかったと思われます。終戦を知った時、社内では「くやしい」と言って泣く若者もいましたが、全体としては意外に平静で格別

の混乱はありませんでした。

家に帰ると、どこからともなく灰がたくさん降って来ましたが、それはかなり離れていた朝鮮軍司令部で書類を焼いているのだということでしたが、その時私は日本の敗戦と、私たちの後ろ盾になっている軍隊の崩壊を実感としてうけとり、悲しみと不安が心の中心っぱいに広がったのを覚えています。

しかし心配されていた一般朝鮮人の動向は割に平穩で、通勤の電車の中は急に混雑し、朝鮮人が私たちを見る目には今までと異なったよそよそしさと不気味さはあったものの、別に危険とは感じませんでした。

銀行など金融機関には預金引き出しの人々の長い列が出来ており、父の郵便局でもこれらの人々の対応におわれて忙しく毎晩遅い帰宅が続きました。

驚いたのは、終戦の翌日から急に物資がどっと豊富に出回り、南大門の市場へ行くと、米、砂糖、粉類といった食糧品から、布地、革製品の靴、鞆に至るまで山のように積み上げられ、お金さえ出せば何でも買えました。一体このような物資は今までどこに隠されて

いたのでしょうか。

日本人の引揚げについても、軍関係の人は早く情報をつかんでおり、早々と引き揚げて行ったようですが、一般の者は正確な情報が不明のまま、ぐずぐずしていた人が多かったようです。もちろん大急ぎで何もかも捨てて帰国する人もありました。日本人の「租界」のようなものが出来て、希望者は残留が認められるといったうわさも流れ、もしそうなら残ってもよいという両親の考えのようでした。

でも間もなく米軍が進駐して来てからは日本人は全部引揚げということが決まりました。

私たちは十一月中旬に京城を離れましたが、それまで市場への買い物も自由で、日ごろ出入りしていた肉屋の主人など「奥さんたち帰らないでよ、帰るとぼくたち商売出来ないよ。」などと言ったり、又ある時は日本の着物が欲しいというアメリカ兵が来ましたが、ちゃんとお金を払って買って行くほど平穩な日々でした。

引揚げて行く日本人にとって最大の関心事は家族の

安全と健康はもちろんですが、今まで持っていた財産をどう処分するか。そして限定された引揚荷物と現金をどのようにして持ち帰るかでした。

朝鮮人の古物商が盛んにおとずれるようになり、又繁華街では、

「お金とりかえるよ」

と大声で叫んでいる朝鮮人が増えました。それは引揚者相手に、日本内地では使えぬ鮮銀券（朝鮮銀行発行紙幣）を日本銀行券と交換する商売でした。面白いことに、最初のころの交換比率は日銀券百円に対し鮮銀券百三十円くらいでしたが、日本人がだんだん減って行くにつれ、私どもが引揚げる十一月ころには日銀券百円に対し鮮銀券七十円と逆転し、それも日銀券の十円札は姿を消し百円札がこれに代わりました。二百円札というものも初めて見ました。それは引揚者が一人千円と定められた制限以上を隠し持ち帰るため出来るだけ枚数の少ない高額紙幣が必要だったためで、こんな時にも需要供給の経済原則が働くものと感心致しました。

次第に日本人が京城を去ってゆくのと入れ代わりに南へ避難してくる北鮮の朝鮮人も多く、京城駅前の広場はひどい混雑で悪臭も漂い始めました。たちまち住宅も払底したようです。私の家にも買い手が現われませんでした。その相手は日本人を奥さんしている金持ちで、北から避難して来る兄弟のため是非家が欲しいのとこのことでした。

京城駅から歩いて五分、ひな壇式の住宅地で六十余坪の土地に四十坪ほどの家でしたが、二万五千元という値段になりました。

当時家の売買については占領軍への届け出と代金の供託が義務づけられていたので、表面は五千元ということにして届け、残金は日本札で払ってくれました。大方の人が住居はそのままにして帰国する状況の中で、あとから考えると例え安い値段ではあってもこのような処置が出来たことは、大変運が良かったと言わねばなりません。

さて、持ち帰り許可の枠を越えた現金をどのようにして隠し持ち帰るかが当時の日本人の悩みの種であり、

又知恵の出どころでした。上陸地の検査で発見された時のうわさがいろいろと飛び交い、「こうするとい」「いや、それは駄目だ」と苦心に苦心を重ね、互いに教え合ったものです。事実、姉の姑は着物の襟に札を縫いこんでいたところ手ざわりで発見され、お金は全部没収された上、あとの検査が厳しくて大変な目にあつたそうです。

糸巻きの下に札を折って入れ、その上から糸を巻くとか、いろいろして見ましたがこれでは札の枚数は知れたもので、結局大部分は母の帯の中に入れることにしました。帯をほどき、帯芯に札をずらりと縫いつけるのです。お札は全部新しいピンピンしたものですから、かきごそと音がします。そこで毎晩家族全員で札を揉むことになりましたが、お蔭で皆、親指の腹が真っ赤にすれてしまいました。お札というものは何と丈夫なものかと思いました。また、せっかくの新しいお札をわざわざ苦勞して汚くするなんて妙な気持ちだと皆で笑い合いながら毎晩もみつづけたものです。

どうやらお金の始末はつききましたが次は持ち帰る物

です。

まず、私は丈夫な帆布を買ってミシン針を何本も折りながら大きなリュックサックを人数分だけ作りました。何しろ各人手に持てるだけしか許されないのです、それに入れる物の選定が大変でした。鍋類も必要だろうし、当座の米、調味料など、入れたいものは山ほどありましたが、何と言つても衣類が主なものとなりました。記念のアルバム類もはがした写真の中から大切なものだけにして、ほかは全部処分しました。

それほどに入れるものを厳選しても、リュックは重くて背負うと一人では立ち上がれませんでした。小柄な弟など、背負ったまま、うら返しになった亀のように手足をばたばたさせる姿に皆大笑いしてしまいました。

それからは各人リュックを背負って毎日家の中で歩く練習です。慣れは恐ろしいもので、皆何とか歩けるようになりました。

「まあ、連絡船に乗るまでのわずかな距離を歩くだけだから」と考えたのは大間違いで、あと釜山ではひ

どくつらい目にあいました。

あのような混乱期には人の弱味につけこんでいろいろな商売が現われて来るもので、大きな荷物一個二百円で船で内地まで運ぶという組織が現われ、私どもも頼んで数個を託しましたが、もちろんそんなものは届くわけがありませんでした。

八月の末ごろ、安否を一番心配していた姉が、夫とともに小さな子供二人を連れて北鮮から脱出して来ました。皆朝鮮服姿で玄関にたどり着いた時、姉は安堵のせいか虚脱状態となり母は泣きました。

日本軍が京城から部隊として早々に引揚げさせられた後、北からばらばら脱出して来た兵隊さんたちは、行くあてのないまま、近くにある天理教教会に収容されていました。内地まで荷物を二百円で運ぶという条件で連れ帰ってくれる人を探しており、私方も一人お願いすることになりました。当時陸軍特別操縦見習士官として比島にあった兄の名前を利用したのです。九州出身の温和な中年の人でした。これで私どもは、両親、弟、妹、姉一家四人、前記の兵隊さんと総勢十人

となり、町会別に名前を登録、引揚げの日時が割り当てられ「引揚証明書」が発行されました。記されているアーノルド少将という名は今でもはっきり覚えています。

引揚直前になって父の郵便局を朝鮮側に引渡すことになり、何とか委員会というところから三人の人が家に来て手続きをしましたが、言葉遣いも態度もきちんと丁寧でした。

出発の日、それまで家で長く働いてくれたオモニーの世話で、その身内の者がリヤカーで荷物を駅まで運んでくれることになりましたが、その時のオモニーの姿がいつまでも思い出されるのです。このオモニーは正直でおとなしい人で家の皆からも信頼されていました。かねがねのんだくれの亭主に苦勞していましたが、よく台所で母に片言の日本語で愚痴をこぼしていました。引揚げて来てからも、母と私は彼女のことを思い出している「今ごろどうしているかしらね」と語り合いました。

出発当日、龍山駅に集合して見ると、どの家族もそ

れぞれ小さな子供にまでも精一杯の荷物を背負わせており、大変な混雑でした。

有蓋貨車に詰めこまれ、途中何度も停車をくり返しながら、ようやく乗船地の釜山に着いた時には皆ぐったりとしていました。

すぐ乗船出来るかと思っていたところ、先の人がかえているということで、市中のお寺に泊まることになりました。道のりは遠くて、重い荷を背負って必死に歩いたつらさは忘れられません。途中の道ばたには、布団類や鍋、食器その他いろいろのものがたくさん捨てられていました。ここを通った人たちがここまで何とかして持って来たものの、ついに耐え切れなくなつて涙をのんで捨てたものでしょう。何とも哀れで惨めな気持ちでした。

乗船が決まってから一晩ホームで待機させられましたが、警備のアメリカ兵は、金網ごしに何かと話かけたり、チョコレートやガムなどをくれたりしました。又乗船の時、皆が必死になって重い荷に耐えながら高い階段を登りかけた時、アメリカ軍の将校が通訳らし

い日本人を連れて階段の上に現われましたが、急に駆け降りて来て私の両手の荷をとり上げて上まで運び、又すぐ引き返して母のを、と何回も往復して手伝ってくれました。連れの通訳も仕方なく手伝っておりましたが、私は今まで「鬼畜米英」と耳にたこの出来るほど聞かされていただけに、意外であり本当に驚きました。当時のアメリカ人は戦勝国としての気持ちの余裕もあつたと思いますが、弱い立場にあつた私どもに示したちよつとした親切心は、非常に快い印象を残しました。

それに反して、日本人の船員たちの引揚者に対する冷ややかさ。例えば、もう七十歳近かった私の父が、よろめいて荷物を床に落とした時、厳しい口調で追いつてた態度には本当に悔しく腹が立ち、そして寂しい気持ちになりました。しかし考えて見ると、彼ら自身他人のことを考える気持ちの余裕もない当時の状況として無理のないことだったかも知れません。

結局は「衣、食、足りて礼節を知る」でしょうか。

招かれざる客――「引揚者」

すし詰めの中船で給食を受けながら、船はやっと仙崎に入港しました。美しい絵のような島々の点在する風景を前にして「ああ、やっと日本に着いた」という安堵感でほっとする一方、あの地で生まれ育った私には、内地は母国とはいえ現実には未知の国です。本来帰るべきところに帰ったという気持ちよりも、むしろあるべきところから追い立てられてやむなくたどり着いた避難場所という気持ち、そしてかの地で今まで頑張ってきた父や母の無念さとも思いやられて複雑な気持ちでした。

仙崎港は豪州兵が管理しており、米軍が管理している博多に比べ上陸時の検査は厳しいと、京城にいる時からうわさがありましたので仙崎着と聞いた時は皆がっかりして不安でした。下船して広場に荷物を並べ検査が始まりましたが、聞いたとおり厳しい検査で、弟の教科書など一冊ずつ振って確かめるという風で、私たちは随って来たお金が心配でひやひやしていました。私のリュックの番になり派手な着物類が出て来た時、一番大切だと母が入れてくれた留袖―それはもう

衣料が姿を消し始めたころ、母が苦勞してこしらえてくれたもの―をいきなりぱっと自分で羽織って

「プレゼント、プレゼント」

と言います。

「断っていいんですよ。お断りなさい」

と通訳の人が何度も言ってくれましたが、厳しく怖ろしい検査にもうすっかり嫌気のさしていた私たちは結局うなずくほかありませんでした。

「サンキュー、オーケー」

とその兵隊さんは大喜びで残りの荷は調べもせず、口笛を吹きながら躍るような足どりで着物を抱えて立ち去りました。留袖は井上が無事帰国した時は結婚式のためにと考えていたものでした。

その井上は戦後間もなく日本赤十字社を通じて無事抑留が確認され、井上の両親始め、私どもも本当に安心し喜んでいたのです。

仙崎の民家に一泊の後、翌朝下関へ向かいましたが、乗ったのは無蓋車で、トンネルの多い山陰線のこと、全く息の詰まる思いで、子供はトンネルに入るたびに

息も絶え絶えの声をあげました。皆全身すすだらけ、鼻の穴を真っ黒にしてやっと下関駅に着きました。あたり一面は焼け野原となっており、もう晩秋の陽はすっかり落ちて暗く、闇の中を父が記憶をたどりながら見つけた電車の乗り場から皆長府行の電車に乗りしました。

父母の郷里は下関市長府町という所で、あるいは空襲で焼失しているのではと思っていた古い家が、東京から疎開していた叔母の管理で残っていたのは本当に辛かったです。海側には神戸製鋼の大きな工場があり、進駐軍の本部となっておりました。そのため長府は空襲せずに残っていたそうだという話がありました。

家に落ち着いてからは、まずシラミ退治でした。長い引揚道中の間に私たちの身につけていたものにはすべてシラミの卵がぎっしりきらきらと光っていました。毎日大きな釜で衣類を煮て、すっかりいなくなるまで半月はどもかかりました。

また、引揚げの時に衣類は高価なよい品ばかりを選んで持ってきたので普段着がなく、毎日の生活では不

便なことになりました。

一番困ったのはやはり食糧でした。農家には一軒の知人もなく、日に日に上がる闇市の品はそうそう手が出ず、わずかな配給品のほかは、比較的安かった「おきゅう」という海藻から造ったこんにゃく状のものをよく食べました。野草、草の蔓などを毎日ゆで、又潮の状態を調べては家中で「あさり」をとりに行きましたが、これは大切な蛋白源でした。庭にはきゅうり、茄子、南瓜、芋類を植えて慣れぬ農作業に励みました。翌二十一年七月、井上がビルマから復員して、そのまま広島南方軍復員本部で残務整理をしており、十月に結婚することになりました。井上の両親は長崎の田舎に引揚げていたので、結婚式は私の家に長崎から母と井上を迎えて家族だけの挙式でした。父が謡ってくれた「高砂」が静かに流れていくのを聞いていると万感胸に満ちて言葉がありませんでした。朝のうちに父と井上が下関の闇市に出かけ仕入れて来た尾頭つきの鯛の一尾をあっという間に近所の野良猫に持って行かれたのは一大珍事で残念でしたが、母は「おめでた

いのだから猫にもふるまってやりましょう」と笑っていました。

式の後すぐ私たちは長崎の両親のところへ参りました。佐世保の近くの「潜竜」という炭坑の町外れで、井上の遠い親戚の世話で農家の納屋を借りておりました。

井上は九年間を連統第一線部隊で幾度か死線を越えて負傷もうけながら奇跡的な生還で、婚約当時の面影とは打って違って、骨と皮だけにやせ衰えて、眼だけが鋭く光っていましたが気持ちには昔と一つも変わってありませんでした。

いよいよ私どもの新しい人生の出発です。何はともあれ職を探さねばなりません。井上の父も朝鮮に骨を埋める覚悟で明治年間に郷里を出ているので今更戻って見てもその地域における人間関係は極めて薄くなっているのは当然で相談する人もありません。井上も出征中だったため、勤務していた銀行との連絡も取れず、生活の基盤のすべてを欠き、もちろんお金もあろうはずはなく、ただ長男としての親に対する責任感だけが

重くのしかかっていました。

とりあえず付近の炭坑にでもと話していたところ、井上の弟（三井物産京城支店に勤めていて召集、部隊解散の後、物産富山支店におりました。）から大正海上（現三井海上）で人を探しているとの知らせがあり、近くの高岡市には戦前嫁いだ姉も住んでいるところから、思い切って富山行きを決心しました。

昭和二十二年二月、復員局を辞め、両親を残して二人はリュックを背負い、満員の汽車に乗りこみました。北陸線に入ると破れた窓ガラスの代わりに板を張ったその隙間から粉雪が吹きこみ、厳しい北国の冬が思いやられ心細い思いでした。高岡に着いた時は、あたりは深い雪に埋まり、横なぐりの吹雪で前もよく見えないうちの中をようやく探し当てた義姉一家では温かく迎えてくれました。その夜出された真白い御飯と、白く大きな大根のお漬物の味は今でも忘れることが出来ません。

その後井上は東京本社で採用試験を受け、富山出張所勤務となり、姉の近くの呉服屋さんの離れ、四畳半

の部屋に簡単な流しのついたものを借りうけ、そこから出張所に通うことになりました。

そのころ忘れられないことがあります。井上は復員本部を辞める時、それまで着用していた軍服の外套と靴をそのままに高岡に来たところ、しばらくしてそれを返納するようにという連絡がありました。寒い雪国ではかに代わりのものもなかったのですが、他人に借りを作ることを最も嫌う性格の彼はすぐ小包にしてこの二品を送り返しました。今思うとあの当時、返納を催促する方もする方なら、返す方も又返す方です。井上が九年にも及ぶ生死をかけた、御奉公の後、復員時一律に三百円が支給されただけでした。あとで聞くと復員時には相当の物資を持ち帰った人はたくさんいるようです。これは正直に馬鹿をつけ、しんにゅうをかけたようなものだとして二人で思い出しては笑いました。

このような人ですから、闇物資を動かすといった才覚などあるはずもなく、反対に闇市に行くと眼つきが鋭かったので刑事と間違えられることが度々でした。

引揚者という言葉とその響きには、特別の保護を要

する同情されるべき立場にあるものを意味すると同時に、国全体が敗戦の混乱と窮乏にある時、外地からの帰国者は、軍人と一般人と問わず歓迎されないのは当然でしょう。まして伝統的に郷土意識の強い地方、特に高岡のように戦災をうけてない所では、ほかからの流入者は迷惑でもあり厄介者と思われたようです。植民地で生まれ育った私どもにとっては、気候風土、言葉、伝統的なものの考え方などすべてに異和感があり、日常生活もつらいものがありました。

住まいは曲がりなりに確保したものの、寒い国だけに燃料と食糧には苦労しました。富山地方は米産地で農家はもちろんのこと一般の人でも白い御飯を食べているのに、配給は芋ばかりでそれも一か月分の食糧として俵でどんと配給され、中身を不良品が多く、時には米の代わりとしてザラメがバケツ一杯ということもありました。毎日用意する井上の弁当箱にはお芋ばかりで、地元の社員の方々がお米の弁当であることを考えると申しわけないやら悲しい思いをしました。

毎日の煮炊きや暖房用の燃料の入手も困難で、ある

日本炭の買い出しに山奥まで出かけ三拝九拝して買って売ってもらった一俵を二人で分けて背負い遠い山路を下り、川辺の堤で休んでいますと

「やあいやあい、男と女と」

と騒ぎ立てる子供の声とともに小石がばらばら飛んで来たのにはびっくりしました。この地方では、夫婦でもまだ並んで歩くと白い眼で見られるのでした。

井上も三十歳をすぎてからの中途入社で、仕事の上でもいろいろなハンディを負い、人にはわからぬ苦労も多かったようです。このような状況のなか、富山、高岡の両出張所勤務を経て金沢支店に転じましたが、その間三人の子供に恵まれました。

経済的には、増加する子供の養育費のほか、長男として長崎の両親への仕送りが欠かせず大変苦しいやうくりでした。弱音を吐かず何とか頑張り通せたのも、やはり「招かれざる客」である引揚者の意地が支えになっていたのかも知れません。

北陸は雨が多く「弁当忘れても傘を忘れるな」と言われる通り、冬の大雪とともに年間の日光量は極めて

少なく、乾燥した大陸の青空のもとに育った私たちには適さなかったのか、子供の成長にもいろいろと障害が始め、それを心配した井上は、思い切って天候のよい表日本地区への転職も考え、法曹界を目指して司法試験へ挑戦するため秘かに勉強を始めておりました。又、かねてから地方にばかり長くいると刺激に乏しく呆けると言って井上は機会を求めて各方面の論文などに応募していましたが、幸いにも業界関係の論文をはじめ、英文毎日企画の英文ショートストーリーコンテストに、更に法務省と朝日新聞企画の憲法論文など全国的なものに相次いで入選を果たしました。このような幸運が一つの動機かと思いますが、間もなく子供の健康のためにも願わしい東京本社へ転勤となりました。昭和二十九年のことです。

このころになってようやく井上の仕事の上でも又生活の上でも一応安定し、長崎から両親を呼び寄せることが出来ました。

そして、いつの間にか私どもの周囲から「引揚者」という言葉が消え、私自身の意識からも薄れ遠ざかっ

て行くのを覚えました。

その後もいろいろなことがありましたが、井上の会社生活も比較的順調で、昭和四十八年役員で会社を退くまでに三人の子供はそれぞれ元気に成人し、巣立って行き、再び二人だけの静かな生活に戻りました。

国家間の曲折した政治的な関係とは別に、私どもが生まれ育ったあの地で培ったさやかではありますが個々の人間関係を懐しみ、四季折々には、厳しい冬、又澄み冴えた青空にそびえ立っていたボブラや白いアカシヤの花、そして真黄に咲きこぼれていたれんぎょうを思い出しています。

この横浜に居を構えて二十六年、私が朝鮮で過ごした二十二年を既に越えました。引揚当時は日本に故郷と呼べるものを持たなかった私も、現在は横浜を心の故里として、三年後に控えた金婚式の日を井上とともに楽しみにしております。

【執筆者の横顔】

父親が朝鮮総督府通信局の役人をしていたので、寿

美子さんは大正十二年京城生まれで京城第二高女を卒業し、更に啓星女学院で学んでいた。朝鮮人の友達と仲むつまじ少女時代は幸せそのものの生活である。

昭和十七年に父親との関係から適当な男性がいるから見合いせよとのことで面談したところ、この男性ならとも思い、寿美子さんは両親のすすめに応じ、結婚の式をあげた。その青年が井上陸軍幹部候補生の見習士官である。

父親は、娘の結婚を大変喜んで、土地付きの四十坪の住宅を新築し、当時の金額三万五千円を支払った。この親の有り難さを今も忘れてはいない。

いよいよ、日本が米諸国の世界相手の戦争の真っ只中で、寿美子さんは井上士官と結婚生活に入れない。お互いに健康で尽忠報国を誓い結婚式の式典はその後にあげようと言って別れていた。

寿美子さんは昭和二十年五月、京城の三井金属㈱に採用となり、役職員から信頼をうけて真剣に執務していた。

ところが、昭和二十年八月十五日、日本敗戦、朝鮮

總督府解体、日本人全員引揚げ命令となった。全く天地覆った感じ、悪夢のようだった。

父と母の兩人は山口県下関市の生まれである。

寿美子さんは、朝鮮生まれなので、仙崎に入港した。日本は未知の国なので珍しかった。

寿美子さんにしては、何が何でも、井上氏の情報把握が最優先で、復員局や日本赤十字社を訪ねて確認に奔走した。

昭和二十一年七月に、井上少尉は南方ビルマから骨と皮ばかりになって広島に復員してきた。二人ともうれし涙で感きわまりの喜びようだった。しばらくの間、静養を続けて健康をとりもどし、復員局に採用されて執務することとなり、十月には井上氏と結婚式を挙げてみんなから祝福していただいた。

昭和二十二年二月復員局を辞し、主人井上氏は三井海上火災保険(株)本社の採用試験に合格し、本社勤務から、やがて富山出張所に転勤し、更に東京本社に転勤となった。

寿美子さんは、井上主人の赴くところ、どこへでも

針の糸のごとく世帯のきりまわしから、各種団体、趣味の会などに出席しては咲く花に蝶が舞うごとく場内を沸かしている。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

親子苦難の引揚記

石川県 平野 高年

前編に父高次郎が九十五歳の老齢のため、父から率直に述べてもらった実話を記し、後編に私(高年)の勞苦体験記とする。

父、高次郎の話

私は、福井県越前海岸の鮎川町(元国見村役場所在地)から一里ばかり山間部へ入り込んだ国見村字三本木に生をうけて十三年余りを父母、姉妹らと共に農作業に従事しておりました。十四歳の九月から十六歳の九月まで、大阪市北区源蔵町の加藤商店(叔父の家)